

談山神社蔵 法華曼荼羅について 中

宮 次 男

第四幅—卷四(二百二十一号図版四、挿図9a・b)

五百弟子品第八 ここにて扱われる主題は、五百の阿羅漢が仏前にて授記を

得た喜びを譬喩でもって表わした有名な衣裏繫珠の物語である。

16 譬如貧窮人 往至親友家 〔其家〕甚大富 具設諸肴饌^節

7 以無價寶珠 繫著內衣裏

8 〔默與而捨去 時臥不覺知〕是人既已起 遊行詣佗國 求食衣自濟 求衣食^他

自濟 資生甚艱難^(重複)

15 〔得少便爲足 更不願好者 不覺內衣裏 有無價寶珠〕 與珠之親友 後見

此貧人 苦切責之以^{示以所繫珠}

14 貧人見此珠 其身大歡〔喜 富有諸財物〕(二九中・偈)

以上この品の題辭は語句を一部省略するほかは殆んど譬喩の部分の重偈を全て挙げているが、図様もまた、画面の下部に、中央の一部を除いて、右から左へU字形に带状をなして連続的に描かれる。すなわち、貧窮の人が富める友人の邸宅にて酒食の馳走をうけ、別室でねむっている間に衣裏に宝珠をかけられる(7)。覚めて、その家を出て遊行し(8)、貧窮のため他家の戸口に立って施物をうけ(16)(この場面は題辭と異なる。題辭は絵(7)の前半に当る)、更に施物を乞いながら旅をつづける。そして珠を衣裏に繫けてくれた友人に再会して、宝珠を

みせられ(15)、ついに富者となって大きな家に住み、安樂に暮すことができた(14)(14の図様は題辭の後に続く句意を表わす)。

以上多少絵と題辭が齟齬するが衣裏繫珠の譬喩を描いた図様である。話の筋の發展にともなうて、带状に展開してゆく図様の変化は、縦と横の違いはあるが、絵巻をみる趣に似るもので、このような説話画と絵巻の相関々係を考える上にまことに興味深い。

授學無學人記品第九 題辭、図相とも扱われていない。

法師品第十 ここでは法華經を護持弘通する者の諸功德を図す。まず、

11 五種法師

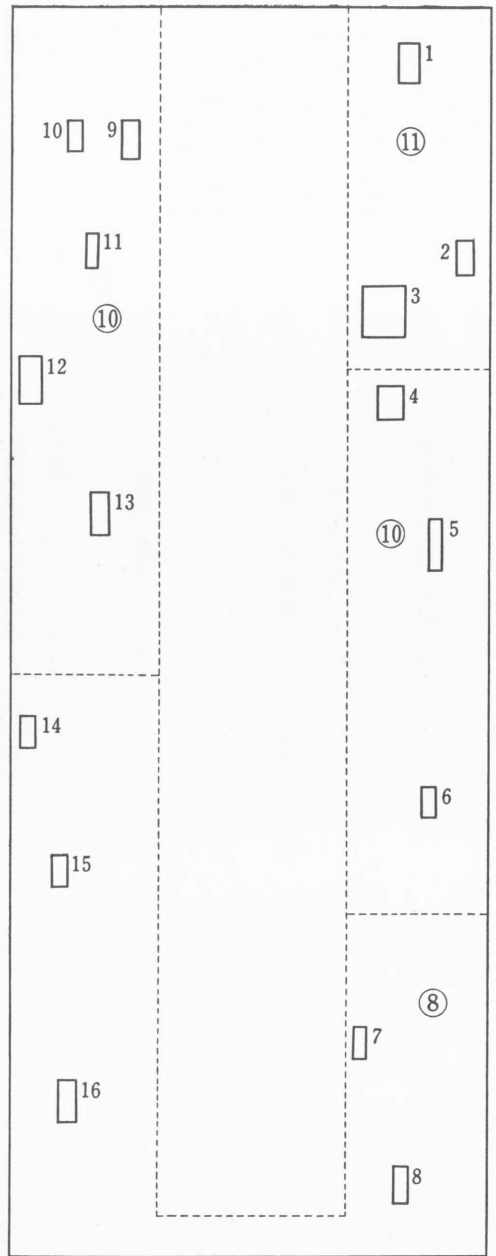
6 十種供養

の両図は、この品を総括する図相であり、更にこの經を護持、弘通する者に対する如來の被護を图示している。

10 〔藥王當知。如來滅後。其能書持讀誦供養爲他人說者。〕如來即爲以衣覆之。^(三一中)

9 〔當知是人〕與如來共宿。則爲如來手摩其頭。(三一中)

12 若經卷所住之處。皆應起七寶塔〔極令高廣嚴飾……中略……〕^(なし) 若有人得見此



挿図9 a 法華曼荼羅 第四幅 奈良 談山神社蔵

b 同 見取図

分別説) 大慈〔悲〕爲室 柔和忍辱
衣 諸法空爲座 處此爲說法 (三二上
・偈)

5 〔若說法之人 獨在空閑處〕 寂莫
無人聲 讀誦此經典 我今時爲現 清
淨光明身 (三二中・偈)

先ずこの品を総括する絵として、五
種法師は宝塔左側上部にあり、如来像
を中央に安置した仏殿で、法華経を受
持・読・誦・解説・書写する五種の法
師(11)が描かれている。また、十種供
養は右側やや下部に、この幅ではちょ
うど五種法師の対角線上に、經典を安
置した仏堂を囲むように、華・香・瓔
珞・抹香・塗香・焼香・繪蓋・幢幡・
衣服・伎楽の十種を供養する人々を描
く(6)。如来の被護関係について
は、両側にそれぞれあって、左側上か
ら持経僧に衣を与える如来(9)、写経
僧の頭をなでる如来(9)を画し、更
に、經典の納められた多宝塔を供養す
る俗体(12)。高原穿鑿の譬喩としては、
岩山の頂上を掘る者と、その崖下の洞窟の前で説法する如来像を描いて、この
譬喩を具体的に説明する(13)。次にこの経広説の心得としては、右側に、室内に
て如意を持って諸人に説法する僧(4)。その上部で庵舎に独居する持経僧、及
び(4)を隔て下に庵舎の読経僧の前に如来が現れる光景(5)が示されている。

塔禮拜供養。〔當知是等〕皆近阿耨〔多羅三藐三〕菩提。(三一中一下)
13 〔如人渴須水〕穿鑿於高原 猶見乾燥土 〔知去水尙遠〕 漸見濕土泥
決定知近水 (三二上・偈)

4 〔若人説此經 應入如來室 著於如來衣 而坐如來座 處象無所畏 廣爲

談山神社蔵 法華曼荼羅について(中)

この庵舎独居の僧及び如来出現は、題辭(5)を具体的に表したと解釈される。

見寶塔品第十一 ここでは、多宝如来の宝塔の出現と、十方諸仏の來集が図示されている。

2 「爾時十方諸佛各告衆菩薩言。善男子。我今應往娑婆世界釋迦牟尼佛所。并供養多寶如來寶塔。」時娑婆世界即變清淨。琉璃爲地。(三三上)

3 「爾時東方」釋迦牟尼佛所分之身。百千萬億那由他恒河沙等國中諸佛。各各說法來集於此。如是次第十方諸佛皆悉來集座於八方。(三三中)

1 「於是釋迦牟尼佛。」右以指開八寶塔戶。出大音聲。如却關開大城門。(三三中)

図様はこれを一括にして構成したもので、字塔の右側最上部に描き、最も効果的に示している。すなわち、中央に雲中より涌出した多宝塔が、すでに戸が開かれて、中に多宝如来が坐した形で描かれ、それを圍繞して諸仏が、經に説くように、宝樹下に坐し、多くの人々がこれを礼拝する図相に表現されている。見寶塔品の經意絵としては、多宝塔内の多宝釈迦二仏并坐の図相が最も多く用いられているが、本軸に於てはこれを踏襲しないで、独自の表現をとっている。本図はこの点、甚だ興味がひかれる。

註23 平家納經の同品見返絵は十種供養具のうち、幡幢、繪蓋、伎樂器を描いている。

第五幅—卷五(挿図10 a・b)

提婆達多品第十二 ここでは法華經を求めた王(実は釈迦)が無上菩提を願って、阿私仙について修行精進した物語と、文殊の涌出及び竜女の成道を図示する。

13 「爲欲満足六波羅蜜。」勤行布施。心無悋惜象馬七珍國城妻子奴婢僕從。「頭目髓腦。身肉手足。」(三四中)

12 即隨仙人供給所須。採果汲水拾薪設食。

11 供給所須。採果汲水拾薪設食。乃至以身而作牀坐。

以上が王の求法の物語で、字塔左側の下部に描く。最下端に王の住居が示されているが、そこでは衆人にあらゆる財宝を布施する王の生活が描かれ(13)次に上に向って物語が發展する。すなわち、獸皮を着た阿私仙に導かれて王の一行が山を登り、仙人の住窟に向う。一方、仙人の住窟いでは、すでに仙人が經を読む姿で表わされ、岩下で薪をになう王の姿があつて、これらは岩山で区切られた同一郭内に描かれている(12)。更に窟内にて読經する阿私仙と近くの山で果を採り薪を拾う王たちの姿(11)が描かれ、やや複雑な構成とはなっているが、この物語の展開が示されている。

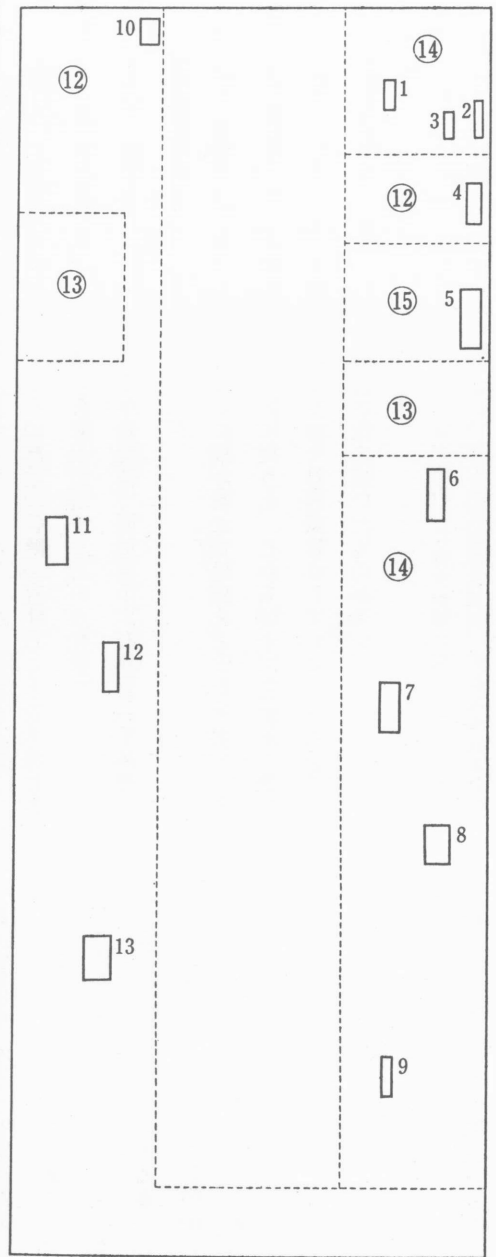
次に文殊の涌出と竜女成道は

10 「爾時文殊師利。……(中略)……從於大海娑竭羅龍宮自然踊出。住虛空中詣靈鷲山。」從蓮華下至於佛前。

4 「龍女。忽然之間變成男子。具菩薩行。」即往南方無垢世界。「坐寶蓮華成正覺。」(三五下)

まず、龍女成道の話を説く文殊師利の出現を示す。しかし、字塔両側の最上部に、それぞれ、多くの菩薩衆に圍繞された雲中の多宝塔が描かれるだけで文殊は出現しない。左側に題辭(10)があるわけであるが、この題辭と図相とは合致しないので、直ちに理解しがたい。しかし、この卷五の説かれる舞台は、前の見寶塔品にみる、多宝・釈迦の二仏が並坐する法会であるから、ここにみるような図相が最上部にあることは、たんに題辭にとらわれることなく、もっと広義に観る必要がある。

次に竜女成道は、ここではもうすでに成道をとげて南方無垢世界に安住する仏の姿として表わされている。すなわち、蓮池を前にした仏殿で脇侍の菩薩をしたがえて坐す姿となっている。しかし仏菩薩の面貌が、何となく女性を思わせる顔立ちとなっていることは見逃せない。



挿図10 a 法華曼荼羅 第五幅 奈良 談山神社蔵

b 同 見取図

護持弘通を勤めるこの品にふさわしい図様である。平家納経の同品見返絵と主題に於て全く同じといえるものである。右側では(5)と(6)の間に、庵舎でねそべる比丘をたずねて合掌している比丘が描かれているが、これは増上慢の比丘に経を説く僧を表すものと考えられる。

法華経には、経の護持、弘通を説くところ甚だ多く、従って、ここにみる両図を特に勸持品所説の図相に決めることは、いささか早計のようではあるが、しかし、巻五に於て、またこの幅に限定する時、他品に属させるよりは勸持品所因とみる方が穏当のように考えられる。

安樂行品第十四 ここでは末法弘経の心得として四安樂行と、諸法の中、法華経の最も貴いことを転輪王譬明珠の譬喩をもって説く部分が图示される。

勸持品第十三

この品に関する題辭は書かれていないが、字塔両側にそれぞれ一つずつこの品に因む図相と考えられるものが描かれている。左側では、やや上部に、山間の仏堂にて、供養具の置かれた机の前で（その奥に仏像が安置されていることが予想される）合掌する二比丘が描かれているが、これは法華経の

四安樂行としては、字塔右側の上部に、

2 第一身安樂行

1 第二口安樂行

3 第三意安樂行

が、それぞれ庵舎にて読経(1・2)、誦経(3)する比丘が表わされ、更に右側最下部に仏殿にて衆人に説法する三尊仏で再び

9 第三意安樂行

を示している。しかしこの最下段の図については、その上に描かれている転輪王の譬喩が第四誓願安樂行所説の譬喩であり、また(3)と重複しているところから、「第四誓願安樂行」と題した方がむしろよいように考えられる。

転輪王譬中明珠の譬喩は、

8 「譬如強力轉輪聖王。欲以威勢降伏諸國。」而諸小王不順其命。時轉輪王。起種種兵。而往討伐。(罰) (三八下)

7 譬如強力 轉輪之王 兵戰有功「賞賜諸物」。(三九上・偈)

6 如有勇健 能爲難事 王解譬中 明珠賜之。(三九中・偈)

図様は(9)の上部に下から上へと展開する。楯を並べて対立する兩陣の間での戦闘(8)、戦功ある者に恩賞を与える場面(7)、更に特に功勞のあった者に王が譬中の珠をとり出して与える光景(6)と順次上方に向って描かれている。

從地涌出品第十五 ここに描かれるところは、釈迦が、自分の滅後にこの法華経を護持し、誦誦し、広く説くところの無量の菩薩が存することを大衆に告げると、この言を証して、その無量の菩薩が出現するという光景で、

5 佛說是時。娑婆世界「三千大千國土地皆震裂。而於其中」有無量「千萬億」菩薩摩訶薩同時涌出。彌 (三九下—四〇上)

と題辞にある通りである。しかし、ここに描かれた仏は殆んど如来形で、菩薩形は最前列に二尊あるのみである。経に従うと、これらは全て菩薩形で表わした方が正しいようで、中国に於ける変相では菩薩形をしている。また日本の法華経絵に於ても、地中から半出の菩薩像を描いたものが多い。(26)

註

24 竜女成道の図相としては、海中より宝珠を捧持した竜女が雲に乗って現れ、釈迦の所に向う図様となるものが一般に多い。平家納経同品見返絵、岩崎家蔵法華経変

相冊子など好例である。

25 妙法蓮華経文句(大正三四)による分類。

26 燉煌壁画では松本栄一氏「燉煌画の研究図像篇」一一八頁によると、地中より雲に乗って多数の菩薩が涌出する有様が、雲端を地面に垂らすようにして表わされている。また岩崎家本法華経変相冊子もこれと同様である。日本に於いては、地中より半ば身を出す菩薩を描いたものが多く、本法寺本、本興寺本をはじめ、紺紙経見返絵などに見ることができ。

第六幅—卷六(挿図11a・b)

如來壽量品第十六 仏の寿は実是不滅であるが、而も滅度する所以は、衆生を救わんが為の大慈悲の方便であり、衆生に懈怠の念を起させぬ為に滅度することを良医の妙薬に譬えて説く譬喩がここでは主題にとりあげられている。

17 「其諸子中」不失心者。見此良薬色香俱好。即便服之病盡除愈。(四三上)

16 「復至他國」遣使還告。汝父已死。是時諸子聞父背喪。心大憂惱而作是念。

若父在者。慈愍我等能見救護。今者捨我遠喪他國。自惟孤露無復恃怙。常懷悲感。

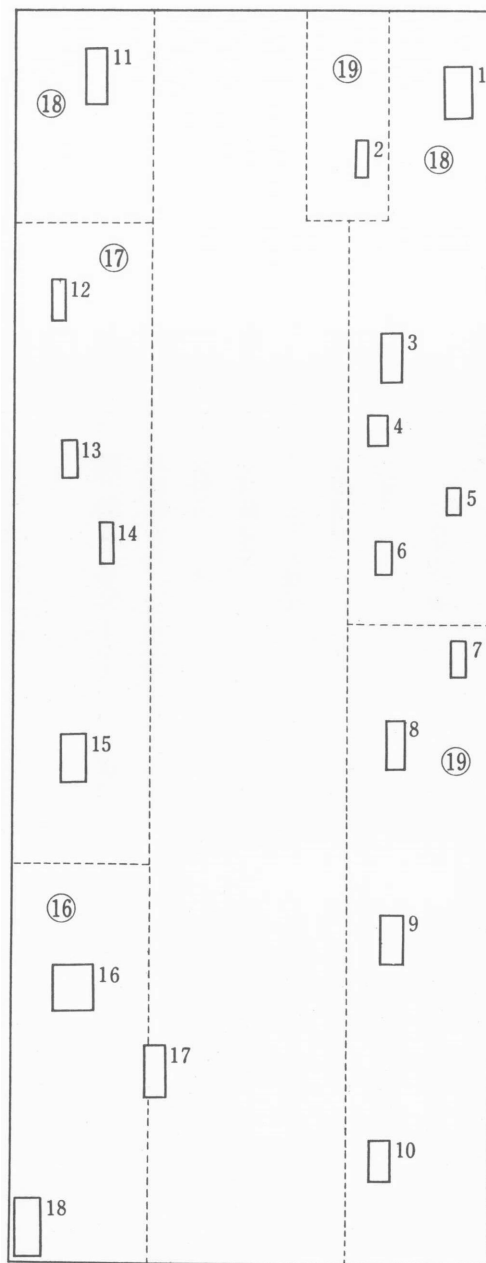
18 心遂醒悟。乃知此薬色香美味。味香美 即取服之毒病皆愈。(四三上—中)

図様は字塔左側下部にあり、父から良薬の入った壺を与えられる所(18)。良薬を服用する男(17)。父が再び旅立った後、使をうけて父の死を知り、父の残し置かれた良薬にかけよる童子(16)が三段に分けて描かれている。ここで注意すべきは、成人と童子が対照的に示されていることであって、父の生存中に薬を服むのは成人であり、父の死後に薬の価値を知るのは童子で、経に説く心を失わざる者と失いたる者を成人と童子形でそれぞれ表現している。

分別功德品第十七 ここでは、如来寿量の長遠であることを聞き知った人々

が得る諸功德を描く。先ず仏に対する供養として、

15 其大菩薩衆 執七寶幡「蓋」 高妙万億種 次第至梵天(四四下・偈)



挿図11 a 法華曼荼羅 第六幅 奈良 談山神社蔵

b 同 見取図

と題し、山間、平地に群る諸仏がそれぞれ宝樹様の天蓋で蔽飾された光景が字塔左側の中程に描かれる(15)。そしてその上方に諸の功德の中で、

12 讀誦經典

13 廣爲他說⁽²⁷⁾

談山神社蔵 法華曼荼羅について(中)

即爲方便說 涅槃眞實法 (四七中・偈)

1 諸人聞是法 皆得阿羅漢 具〔足〕六神通 三明八解脫 最後第五十 聞一

偈隨喜 是人福勝故^彼 不可爲譬喻(四七中・偈)

4 若人爲是經故。往詣僧坊若坐若立。須臾聽受。緣是功德轉身所生。得^阿上妙

14 正行六度⁽²⁸⁾

の諸行為が図示される。すなわち、下から、多宝塔のある寺院の僧坊で衆僧に食物を施し供養するところ(14)、別棟で経を持つ僧、如意を持って俗体の人に経を説く僧、或は禪定する僧などの姿(13)、及び、少しはなれて、山間の庵舎で片手に経を持ち、他手は衣服を持って、これを人に施す僧と、隣接の庵舎で経を読む僧(12)がそれぞれ描かれている。なおこれら三場面のうち、持経して衣服を施す僧の図はこの品で説く「兼行六度」の図相と解される。

隨喜功德品第十八 ここでは、法華

經聽聞の喜びとその功德を図示する。

11 有人報^求福。隨其所欲娛樂之具皆給與

之(四六下)

3 〔如有大施主 供給無量衆 具滿八十歲 隨意之所欲〕 見彼衰老相

髮白而面皺 索^齒疎形枯^闕 念其^阿不久 〔我今應當教 令得於道果〕

象馬車乘珍寶輦與天宮。(四七七)

5 「是人功德」轉身。得「與」陀羅尼菩薩共生一處。(四七七)

6 世々所生。見佛聞法。(四七七)

先ずこの功德の喜びを娯樂の具を与えられた喜びに譬えて、大邸宅にて衆人に諸の玩具を与える光景を字塔左側最上部に図示する(11)。これは位置的に云ってもまたその内容からもこの巻全体に關与する図様で、右最上端にある說法圖(1)と対応する図相である。

次に聴經の諸功德については字塔右側の上半部に描いてあって、上部に仏殿内の仏說法(1)を圖し、この功德の無類であることを示す。そして、その下に諸人聴經の有様(3)が描かれている。しかしここには仏の姿が示されず、ただ庭前に法輪がいくつも描かれて、これによって仏説の及んでることを暗示している。また、来世における功德としては、(1)の前にある四頭立の馬車に乗る王侯、及び、(3)の外郭の山沿いに輦輿、象に乗り、從者をしたがえて行進する人々(4)を描いて聴經者の来世の姿を示す。更に、一家屋中に菩薩(陀羅尼菩薩)と同居する僧(5)、仏を礼拝する僧(6)を描いて、それぞれ題辭を具體的に圖化している。

法師功德品第十九 法華經を受持、誦、解説、書写する人の得る諸の功德を示すもので、右の行をした人は下は阿鼻地獄から、上は有頂天に至るまでの万象を見聞知することができ、諸の利益を得るといふ。

9 地獄象苦痛 種々楚毒聲 餓鬼飢渴逼 求索飲食聲

10 諸阿修羅等 居「住」大海邊 自共言語時 出干大音聲(四八上・偈)

2 諸比丘象等 於法常精進 若坐若經行 及讀誦經「法」或在林樹下 專精而坐禪 持經者聞香 悉知其所(四九中・偈)

7 諸天龍夜叉 羅刹毗「舍」闍 亦以歡喜心 常樂來供養(四九下・偈)

8 是人所方面 諸佛皆向其所說法。(四九下)

これらの図としては、字塔の右側最上端に、海中の岩山にある宝殿や涌雲の上にある宝殿を描いて有頂を示し、右側下部に、地獄、餓鬼、野馬(畜生)(9)や阿修羅の本陣(10)を描く。なお、この図様は巻一ですでにみた序品の図相に類似するものである。

また法師の功德としては、右側上方に庵舎で精進する持經僧に往詣する比丘(2)を描いて、聞香の威力を示す。また右側中程に、屋内で読經する僧のもとに、仏が聖衆をひきつれ、雲に乗って来至し(8)、その後方から天竜諸善神が雲に乗って来集する(7)。この(8・7)両聖衆は經句の上では別処にあるわけであるが、ここでは同一の読經僧のもとに來集する光景に表わされている。經意繪としてはむしろこのような表現の方が理解しやすいように思われる。

註

27 妙法蓮華經文句(大正三四)に説く現在四信の第三品。

28 妙法蓮華經文句(大正三四)に説く如来滅後五品の功德の第五品で、本図様に關する經本文は「若人讀誦受持是經爲他人説。若自書若教人書。復能起塔及造僧坊。供養讚歎聲聞衆僧。亦以百千萬億讚歎之法。讚歎菩薩功德」(大正九)

29 註28の五品功德の第四品。本図様に關する經本文は「有人能持是經。兼行布施持戒忍辱精進一心智慧」(大正九)

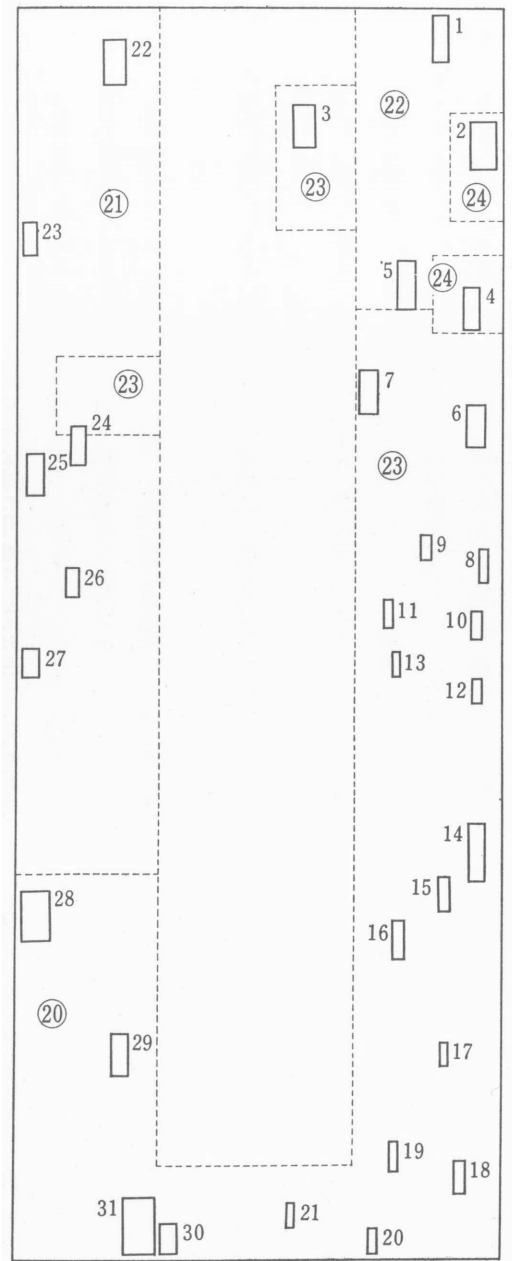
戒忍辱精進一心智慧」(大正九)

第七幅—卷七(挿図12 a・b)

常不輕菩薩品第二十 何人に向つても常に礼拝して止むことのなかつた常不輕の物語を描く。

31 「爾時有一菩薩比丘。名常不輕。得大勢。以何因緣。名常不輕。」是比丘凡有所見。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。皆悉禮拜讚歎。而作是言。我深敬汝等不敢輕。所以者何。汝等皆行菩薩道當得作佛。(五〇下)

29 「説是語時。衆人或以杖木瓦石而打擲之」。避走遠住。猶高聲唱言。我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛。「以其常作是語故。增上慢比丘比丘尼優婆塞優婆



挿図12 a 法華曼荼羅 第七幅 奈良 談山神社蔵

b 同 見取図

図様は左下端から上に向って展開する。即ち、増上慢を思わせる人の門前で地に坐してその邸宅を礼拝する常不軽、門内に入って棒を持った者に追われようとする常不軽(31)。その上方に棒を持った比丘に打たれようとしながらもこれを合掌礼拝する常不軽、また何かを投げつけようとする俗体の人を合掌礼拝する常不軽(29)。そして遂に法華経を聴聞し得た常不軽を衆人が礼拝する光景(28)へと展開する。この最後の段では、常不軽は字塔を礼拝する姿をとっており、その頭から光が放たれて、すでに成道者であることが示されている。

如來神力品第二十一 ここでは如來の神力と滅後の弘経が图示されている。経には如來神力の威大なることを説いて十神力をあげているが、ここでは第一、二の神力をあげている。

22〔現無量神力〕舌相至梵天 身放無量光
數佛(五二中・偏)

夷。號之爲常不輕。』(五〇下―五一上)
28〔廣爲人說是法華經。於時增上慢四象。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。〕輕賤是人。爲作不輕名者。見其得大神通力樂說辨力大善寂力。聞其所說皆信伏隨從。〔是菩薩復化千萬億象令住阿耨多羅三藐三菩提。〕(五一上)

談山神社蔵 法華曼荼羅について(中)

図相としては左側最上端に、雲上の宝殿が描かれて如來の舌相が梵天にとどく程の広長であることが示されている。その下に二仏并坐の多宝塔を圍繞する諸菩薩が描かれているが、これは第六の神力、普賢大会と考えられる。すなわち、多宝如來と共に宝塔中に在る釈迦牟尼仏を、無量無辺百千万億の菩薩及び

諸の四衆が恭敬し圍繞する光景と観られる。

滅後の弘経については、あらゆる場所にて法華経を護持し、弘め、または山谷曠野にても塔を起して供養すべしという経説を描くものである。

23 「若山谷曠野。是中皆應起塔供養。所以者何。」當知是處即是道場。

25 諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。

27 諸佛於此轉於法輪。

26 諸佛於此而般涅槃。(五二上)

これらの図は字塔左側に上から、樹の枝にすがる摩耶夫人の脇下から誕生する世尊(23)、その下に多数の多宝塔、更に多宝塔の前の成道(25)、仏涅槃(26)、衆人に説法する仏(27)、更にその下方に、塔下の仏堂にて経を護持する僧が描かれている。そしてこれらの間には随所に多宝塔が起っていて、経に説く山谷曠野の起塔供養が示されている。なお、ここにも見る如来の聖蹟に関する図相に釈迦八相の内の四相をとりあげていることは、仏教説話を考える上からまことに興味深い。

囑累品第二十二 ここでは釈迦が無量の菩薩に得難き正覚の法を付属するに際して、諸菩薩は大歡喜してこの法を奉行するを誓うという法会の光景と、十方より來集した釈迦分身の諸仏の帰還が主題にあげられている。

5 「皆大歡喜遍滿其身。」益加恭敬曲躬低頭。合掌向佛俱發聲言。如世尊勅當具奉行。(五二下)

1 「爾時釋迦牟尼佛。令十方來諸分身佛各還本土。而作是言」諸佛各隨所安。多寶佛塔還可如故。(五二下)

図様は字塔右側最上部に、すでに扉の閉った多宝塔と、それを圍繞する諸仏が背面を向けて帰途につく光景(1)に表現され、その下に、鷲峯山下の仏説法会が示されている(5)。この説法会では釈迦が右手をさしのべて菩薩の頭をなでる光景がとられているが、これは題辞にはないが、この品巻頭の句「爾時釋

加牟尼佛。從法座起現大神力。以右手摩無量菩薩摩訶薩頂。」(五二下)を表わすものである。

藥王菩薩本事品第二十三 ここにおいては藥王菩薩の本事である一切衆生見菩薩の物語と、法華經受持の功德を图示する。

本事に関する題辞及び図様としては、

16 「復生日月淨明德佛國中。」於淨德王家。結跏趺座忽然化生。(五三中)

15 即坐七寶之臺。上昇虚空高七多羅樹。往到佛所。(五三下)

3 「以偈讚佛」容顏甚奇妙。光明照十方。我適曾供養。今復還親近(五三下・偈)

7 「入於涅槃。爾時一切衆生見菩薩。」見佛滅度悲感懷惱戀慕於佛。即以海

此岸栴檀爲「糞」。供養諸佛。而以燒之。」

6 「火滅已後。」收取舍利。弗作八万四千寶瓶。以起八万四千塔。高三世佛(五

三下)

24 即於八万四千塔前。燃百福莊嚴臂。(五三下)

30 「爾時諸菩薩天人阿修羅等。」見其無量憂惱悲哀。(五四上)

14 「千時一切衆生見菩薩。於大眾中立此誓言。」我捨兩臂。必當得佛金色之

身。若實不虛。兩我兩臂還復如故。作是誓已「自然還復。」(五四上)

以上のように、日月淨明德仏国の淨徳王の家に生じた一切衆生見菩薩の諸行状を描くもので、字塔右側の下方にある淨徳王家に化生した菩薩は、王の膝に抱かれ、諸人がこれを礼拝する(16)という光景からはじまり、次に虚空に昇る童子形の菩薩(14)が王家の屋根の上方に表わされる。天上に昇った菩薩は日月淨明德仏を讃えるが、ここでは字塔の右上に、宝樓の前に坐す如来の姿(3)で表わされている。次に日月淨明德仏は自分の涅槃の近きを告げ諸事を遺言するが、その有様は字塔第八層右側に描かれ、更に涅槃(6の上部)、涅槃後の茶毘(7)、舍利を集めて宝瓶を作る光景(6)など、いずれも衆僧に圍繞礼拝されて表現される。また、茶毘の右側に火中の菩薩が描かれているが、これは題辞は

ないが一切衆生意見菩薩が淨徳王の家に化生する以前に於ける同菩薩の焼身供養を描いたものと観られる。

次に菩薩の焼臂の供養に関する図相であるが、先ず焼臂の光景は字塔左側に、神力品の図相の多宝塔が群起する場面と共通に表わされている。すなわち、舍利を納めた多宝塔の前に坐した菩薩は、両臂を前にさしのべている。そしてその両臂からは煙が立ちのぼり、塔に向ってなびくように表わされて、舍利塔を供養していることが示されている(24)。この両臂を失った菩薩が諸衆より礼拝される有様は画面の下縁中央部に示される。菩薩は両臂を失って蓮台に坐し、人々がこれを礼拝している(30)。そして再び両臂が完備した菩薩は、字塔初層右側に、諸人に両臂をさしのべている姿で表現されている(14)。

以上が一切衆生意見菩薩の聖行の図相であるが、これらは字塔を中心に四方にわたって分散的に配置しているので、物語の筋を追ってこれを理解することは困難である。

法華經を受持する者の得る諸功德については、経では前述の本事につづいて説かれるが、ここに描かれるものは、諸功德を身近な譬喩で具体的に示す段で、此の経は能く一切衆生をして諸の苦惱を離れしめる。此の経は能く大に一切衆生を饒益して、其の願を充満せしめると説き、諸の譬喩で例を示す。

- 13 如寒者得火
- 20 如裸者得衣
商人
- 19 如見得主
- 21 如子得母
渡
- 8 如度得船
- 18 如病得醫
- 10 如暗得燈
- 17 如貧得寶
- 12 如民得王

談山神社藏 法華曼荼羅について(中)

11 如買客得海

9 如炬除暗〔此法華經亦復如是。〕(五四中)

これらの場面は字塔右側から下辺にわたって散在して描き、法華經が広く諸功德を及ぼすことを暗に示している。その図様は水辺でたき火にあたる者(13)衣服の施をうける裸者(20)、品物を並べている商人(19)、母親に遇う幼児(21)川を船で渡る者(8)、医者^爾の往診をうける病家(18)、灯を寄せさせて読書する者(10)、品物を与えられている者(17)、王の前にひざまずく人民(12)、海に船を出す人(11)、松明をつけて山路を行く人(9)で、説明を要しない程に具体的である。

妙音菩薩品第二十四

ここでは、妙音菩薩が淨光莊嚴国から娑婆世界の鷲峯山に往詣して釈迦及び多宝仏塔を礼拝し、法華經の威大であることを説くのを図示する。

2 余時釋迦牟尼佛。放大人相肉髻光明。及放眉間白毫相光。遍照東方〔百八萬

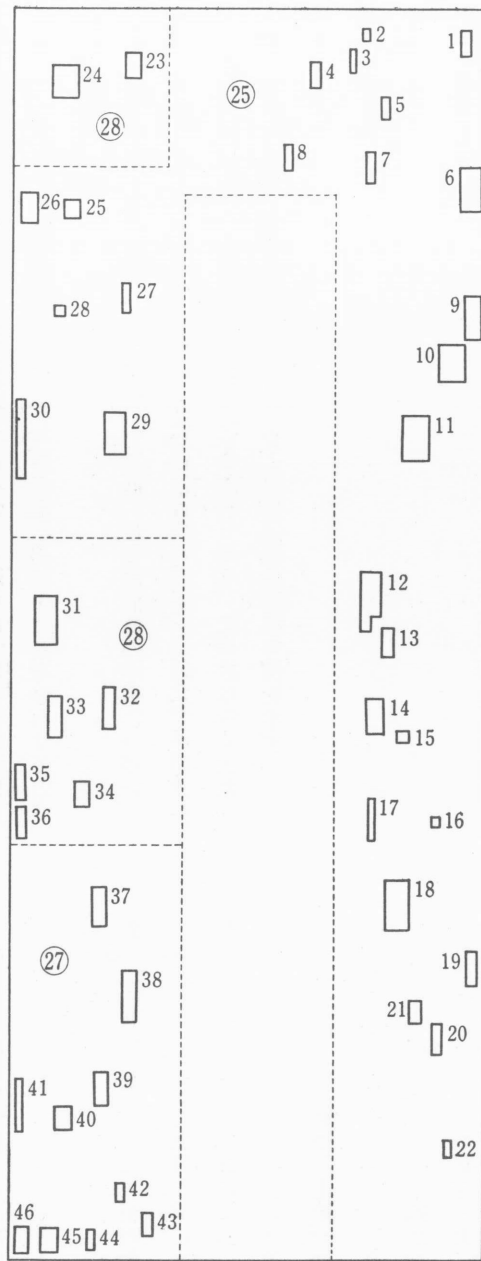
億那由他恒河沙等諸佛世界。〕(五五上)

4 千時妙音菩薩。〔於彼國没。〕與八万四千菩薩俱共發來。(五五下)

この題辭は、釈迦のもとに妙音菩薩が往詣するというこの経の大意を示すものであるが、その図様は比較的簡単である。すなわち、字塔右側上方、囑累品の鷲峯山釈迦説法会の右上に、如来形一尊を描き、その前に蓮華数茎を描添えて(2)、妙音菩薩の往詣の願意を示し、雲に乗って飛来する菩薩(4)を描いて、その發来を示す。この釈迦の前に生じた蓮華は、妙音菩薩が來詣の願意を釈迦の眼前に示そうとして、淨光莊嚴国にありながら化作した蓮華である。また、妙音菩薩の發来は、仏前に向うのではなく、葉王品の日月淨明德仏の説法と、その涅槃の場面に臨むように描かれているのであって、題辭が無ければこの雲上の菩薩が妙音品所因の図様とは解し難い。しかし、数種の内容をもって混然一体となるとこの種の説話画の妙味があるのであって、一つの物件や事相

に数種の意味を持たせることもあるわけで、先に述べた一切衆生意見菩薩の宝塔供養の図もこの意味に於て解釈すべきであろう。

第八幅—卷八(挿図13 a・b)



観世音菩薩普門品第二十五 ここに於いては、観世音菩薩の名の由来、諸の災難を除去する観音力及び、無尽意菩薩の観音供養がそれぞれとりあげられている。

その名の由来については、巻頭の経文を題している。

20 「爾時」無盡意菩薩

19 即從座起。(偏袒右肩合掌向佛而作是言。)

21 「世尊」観世音菩薩。以何因縁名観世音。

18 佛告無盡意菩薩。善男子。若有無量百千億家生受諸苦惱。

17 「聞是観世音菩薩」一心稱名。観世音菩薩。

14 即時「觀其音聲皆得解脱。(五六下) 図様は、字塔の右側下部にあり、先

ず、観音立像を「普門」(22)の前に描いて、散華でアーチ形に嚴飾し、その上部に宝樹下の仏說法会(18)を描く。

そこでは経にあるように、無尽意菩薩(20)がその台座(19)からおりて仏前に合掌する姿で表わされている。その上には斬罪になる罪人(17)や、また山路を荷を背負い、荷馬を追って登る人(14)が描かれ、「苦」(16)「悩」(15)と添書して、世の苦悩を示す。しかし、それと同時にそれぞれに合掌する人物

挿図13 a 法華曼荼羅 第八幅 奈良 談山神社藏

b 同 見取図

を配して、観音を念ずることによりこの苦悩から救われることをも表わしている。

次に念彼観音力により解脱し得る諸の災難については、

12 「若有持是觀世音菩薩名者。」設入大火火不能燒。「由是菩薩威神力故。」若爲大水所漂。〔稱其名號即得淺處〕所處（五六下）

11 若復有人。臨當被害。稱觀世音菩薩名號。彼所執刀杖。尋段段壞。而得解脱。

10 若三千大千國土滿中夜叉羅刹。欲來圖人。聞其稱觀世音菩薩名者。是諸惡鬼。尙不能意惡眼視之。況復加害。

9 設復有人。若有罪若無罪。杻械枷鎖檢繫其身。稱觀世音菩薩名者。皆悉斷壞即得解脱。（五六下）

30 假使興害意。推落大火坑。念彼觀音力。火坑變成池（五七下・偈）

29 或在須彌峯。爲人所推墮。念彼觀音力。如日虛空在（五七下・偈）

また心にひそむ諸悪についても、

2 三毒⁽³⁰⁾

3 「若有衆生」多於聲欲（五七上）

7 便得離欲⁽³¹⁾（五七上）

4 若多瞋恚（五七上）

8 便得離瞋（五七上）

5 若多愚癡（五七上）

1 便得離癡（五七上）

更に願望については、

6 若有女人設欲求男。禮拜供養觀世音菩薩。便生福德智慧之男。（五七上）

さて、これらの図様は字塔兩側にあって、隣家から燃え出した火は、観音像を念じている家を越えてその隣に燃え移り、また水難に遇った人は、水上を歩いて岸に至る(12)。山中にて賊に襲われても、賊の刀は折れて難を免れ(11)、悪鬼に襲われても観音力を念じて助かる者(10)。杻械・枷鎖で苦しむが、観音

を念じてこれをはづし、門外に出ることの出来た人。観音の白毫から光が出てこの男を照している(9)。以上は右側の中程に、下から上へと描かれる。左側では高山の頂から火中につき落されるも、その下は水となって助かる人(30)。同じく絶壁から落されても雲の上に浮いて助かる人(29)が描かれる(二百二十一号図版六)。三毒については右側上部にあって、同衾の男女(3)、その家の庭で女の髪を持って乱暴する男(4)、家にねころんでなまける者(5)と、それぞれを解脱して、観音の画像を拝する男(7)、山陰で観音を拝する男(8)、家の中で観音の彫像を拝する男(1)が対応して描かれている。また願望成就は、同じく右上に、堂内の観音に礼拝する女性と童子を描いて、女性が望み通り男子を生み得たことを示している(6)。

次に観音に対する供養については、

27 無盡意菩薩。

26 「白佛言。世尊。我今當供養觀世音菩薩。即解頸象寶珠瓔珞。〔價直百千兩金〕而以與之。〔作是言。仁者。受此法施珍寶瓔珞。時觀世音菩薩不肯受之〕（五七中）

25 「即時觀世音菩薩」愍諸四象〔於天龍〔人非人等〕〕受其瓔珞。〔分作二分。一分奉釋迦牟尼佛。一分奉多寶佛塔。〕（五七下）

図は字塔左側上部にあり、無盡意菩薩が観音菩薩に瓔珞を捧げるところ(27)と、観音菩薩が釈迦仏にその瓔珞を捧げるのを(25・26)四衆(26)が礼拝する光景で表わされている。釈迦のそばには多宝仏塔があり、経に説くところを忠実に示している。

以上が観音品に関する図相であるが、この品は古来最も信仰のあった観音菩薩の諸功德を説くものであるから、図様もまことに解りやすく表現されている。そしてこの画幅の大部分を占める程に大きくスペースをさいていることは他品の比ではない。

陀羅尼品第二十六 この品は全く扱われていない。

妙莊嚴王本事品第二十七 葉王・葉上の両菩薩が前世にあって、妙莊嚴王の二子淨藏・淨眼であった時、外道を信受する父母を勧めて法華經に帰依させるという物語を图示する。

45 〔時淨藏淨眼〕二子。到其母所合十指爪掌白言。願母往詣雲雷音宿王華智佛所。我等亦當侍從親近供養禮拜。(五九下)

46 〔母告子言〕汝等當憂念汝父爲現神變。若得見者。心必清淨。或聽我等往詣佛所。

41 〔於是二子〕念其父故。踊在虛空高七多羅〔樹〕。現種種神變。於虛空中行住坐臥。

39 身上出水身下出火。身下出水身上出火。(六〇上)

42 入地如水

43 履水如地(六〇上)

44 〔時父見子神力如是。心大歡喜得未曾有。〕合掌向子言。汝等師爲是誰。之弟子。(六〇上)

38 〔爾時〕妙莊嚴王及其夫人。解頸真珠璖瑠價直百千。以散佛上。(六〇中)

37 王與夫人二子是諸層屬。於佛法中出家修道。

40 王家出已。於八万四千歲。常勤精進修行妙法華經。(六〇中)

図は字塔の左側下部にあって、二王子が神変を現す部分と、王の出家、仏供養の部分に分けることができる。まず、王の邸宅にて、二子が母と語る場面(45・46)、神変を現して王家の上空に横臥する童子(41)、頭より水、足下より火を出す童子と、頭より火、足下より水を出す童子(39)、地中に半ば没した童子(42)と水面に立つ童子(43)、及び邸宅の前室にて二子を礼拝する王(44)、が王の邸宅を舞台として表現されている。

王の出家と仏供養の場面は右の光景の上方にあって、仏の説法会の場面に、

王と夫人がそれぞれ瓔珞を捧げる姿で表わされ(38)、更にその上に王、夫人、王子がそれぞれ剃髪している有様(37)が示されている。そして出家精進の王は、再び王の邸宅にもどって、別棟にて合掌する僧形となって表現されている(40)。

以上は妙莊嚴王の本事であるが、限られた画面によく物語の本筋を表現している。

普賢菩薩勸發品第二十八 普賢菩薩の發來と、法華經受持者が得る諸利益を图示す。

31 〔是人若行若立讀誦此經。我〕余時乘六牙白象王。與大菩薩衆俱詣其所。〔而自現身。供養守護安慰其心。〕(六一上―中)

24 若但書寫。是人命終當生忉利天上。是時八万四千天女。作衆始集而來迎之(六一下)

(六一下)

23 即往兜率天上彌勒菩薩所。(六一下)

32 當知是人爲釋迦牟尼佛。如從佛口聞此經典。

35 當知是人供養釋迦牟尼佛。

36 當知是人佛讚善哉。

34 當知是人爲釋迦牟尼佛手摩其頭。

33 當知是人爲釋迦牟尼佛衣之所覆。(六一下―六二上)

図は字塔左側中央に、經を誦誦する衆僧のもとに騎象の普賢が雲に乗って発來し、その白毫から光を放って僧等を照し(31)、その下方に仏を礼拝する僧を二ヶ所に描き(32・35・36)、また仏に頭をなでられる女性(34)、仏衣で頭を覆われる供養者(33)を描いて、仏の被護の多いことを示す。また命終る受持者は、左側最上部に描かれ、写経者を忉利天から奏樂のうちに來迎する天女(24)、及びはるか上空の兜率天に向う群僧(23)でそれぞれ表わされている。

以上が巻八の図相であるが、これらは經意を表わした絵として、殆んど完璧

なまでに経内容を描き出し、しかも解りやすく表現している。

註

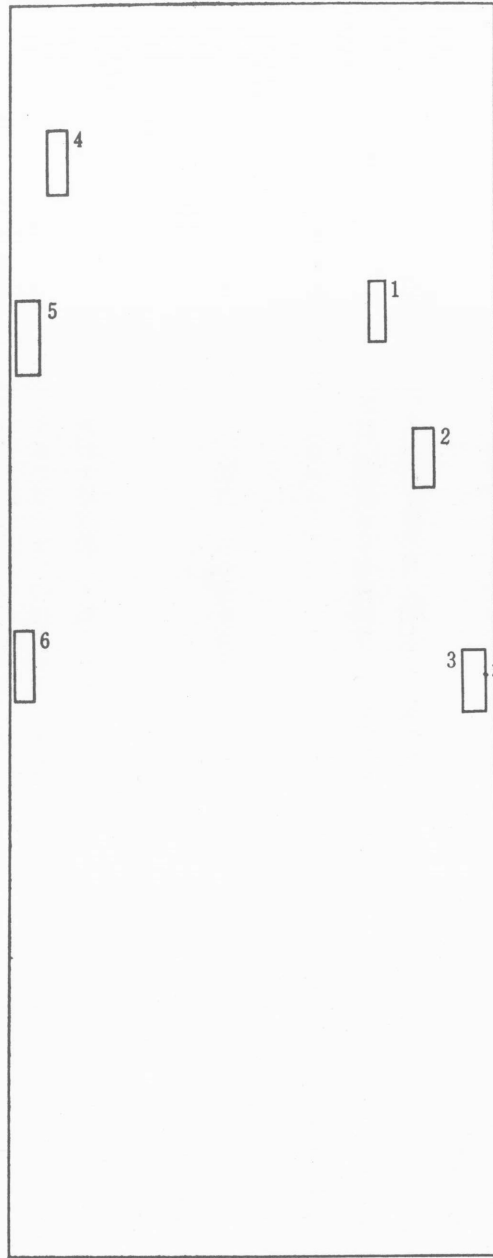
30 妙法蓮華經文句に説く分類(大正三四一四五上)

31 剝落して全く読めないが、三毒の中で、他の題辭と図相との関係から、この句が

妥当と考えられる。

32 註30の書に説く「二求」の内。同書では七難 三毒 二求に分類している。

第九幅―無量義經(挿図14 a・b)



談山神社蔵 法華曼荼羅について(中)

挿図14 a 法華曼荼羅 第九幅 奈良 談山神社蔵

b 同 見取図

無量義經は三品よりなっている。

徳行品第一 王舎城・耆闍崛山中の

仏説法会に集った菩薩衆の利他の徳を讃歎した部分の一部を描く。

3 船師大船師。運載群生渡生死河。

置涅槃岸。

2 醫王大醫王。分別病相曉了藥性。

隨病授藥令衆藥服。(二三八四下)

字塔初層右側に衆生の乗る船二艘が船頭にあやつられており、人々がこれを岸辺から見たり、合掌したりしている(3)。この船頭は菩薩の化身であり、いま涅槃の岸に群生を渡すところと解せられる。また、その上に病家を見舞って薬を与えている菩薩が描かれている(2)。この場合、菩薩は菩薩形で表わされている。

説法品第二 仏が正覚を得たこと及び、八億の諸天が菩提心を発したことを描く。

1 我先道場菩提樹下端坐六年。得成阿

縛多羅三藐三菩提。(三八六上)

4 八億諸天來下聽法。發菩提心。(三八六中)

1 は字塔の右側上部に、未だ正覚を得ない仏が、菩提樹下にて禪定に入っている有様で示されている。この菩薩が水辺に坐しているのは、法は譬えば水が色々な形(井・池・河・海など)になってよく垢穢を洗う如く、衆生の諸の煩惱の垢を洗うという経説に因んだことによるとも考えられる。またこの菩薩の背後に楼閣があるのは、この経はもと諸仏の宮宅の中より来り、去って一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の処に住すという十功德品の所説を活用したと考えられる。

4 の図は経によると、仏が先ず声聞の為に四諦を説いたが、八億の諸天が来下して法を聴き、菩提心を發したとあり、図はまさにこれを描いたもので、経にはこの後に今日、大乘無量義経を演説するに至るまでの諸の経過を説いているのであって、この図は無量義経全体を表わす経意絵とも観られる。左側最上部に位置するのもこのためであろう。

十功德品第三 この経のもつ十功德の中、第五、六の兩功德を描くものである。

6 譬如龍子始生七日。即能興雲亦能降雨。(三八八上)

5 譬始王子。雖復稚小。若王巡遊及以疾病。委是王子領理國事。王子是時依大王命如法教令。群僚百官宣流正化。國土人民各隨其安。(三八八上—中)

第五の功德としては、この経の功德不思議の力を、生れて七日ばかりの龍の子がよく雲を興し雨を降らせるに譬えたもので、字塔初層左側に、雲上の龍が大を降らし、その下では高層の楼閣が水没しようとし、中にいる人々はいずれも合掌するという光景(6)に表わされる。第六の功德は、病の王に代って政治を執る王子が、父王と同様に国を治すことが出来るが如く、この経を持つ人

もまた是の如しという譬喩を描くもので、左側中程に王の居館で、王子を中心に群僚が集まっている光景(5)となっている。

註

33 法譬如水能洗垢穢若井若池若江河溪渠大海。皆悉能洗諸有垢穢。其法水者亦復如是。能洗衆生諸煩惱垢。(三八六中)

34 是經本從諸佛宮宅中來。去至一切衆生發菩提心。住諸菩薩所行之處。(三八七中)

第十幅—觀普賢菩薩行法經(挿図15 a・b)

この幅に於いては、普賢菩薩觀と大乘經典受持誦誦による六根の懺悔清淨の法をとりあげて図示している。

普賢菩薩觀は、

4 有一菩薩結跏趺坐。名曰普賢。身白玉色五十種光。光五十種色以爲頂光。

〔身〕諸毛孔流出金光。其金光端無量化佛。諸化菩薩以爲眷屬。(三九〇上—中)と題し、図様は字塔の初層右側に、雲上の象に乗った普賢菩薩の身体から光が放たれ、その光の中に各々脇侍菩薩をしたがえた如来が坐す図様に表わされている。但し、この象は等長の六牙でなく、二牙の他は短く描かれている。

六根の懺悔法に関しては、眼根の懺悔に称える言葉にある普賢稱讚の語をあげて先ず普賢菩薩を讚え、釈迦、多宝仏を礼讚し懺悔の功德を示す、

7 普賢菩薩乘大法船。普渡一切。十方無量諸菩薩伴。(三九一下)

3 五體投地(三九一下)

9 多寶佛塔從地涌出。釋迦牟尼佛。即以右手開其塔戶。見多寶佛入普現色身三昧。一一毛孔。開流出恒河沙微塵數光明。一一光明。有百千萬億化佛。

(三九一下—三九二上)

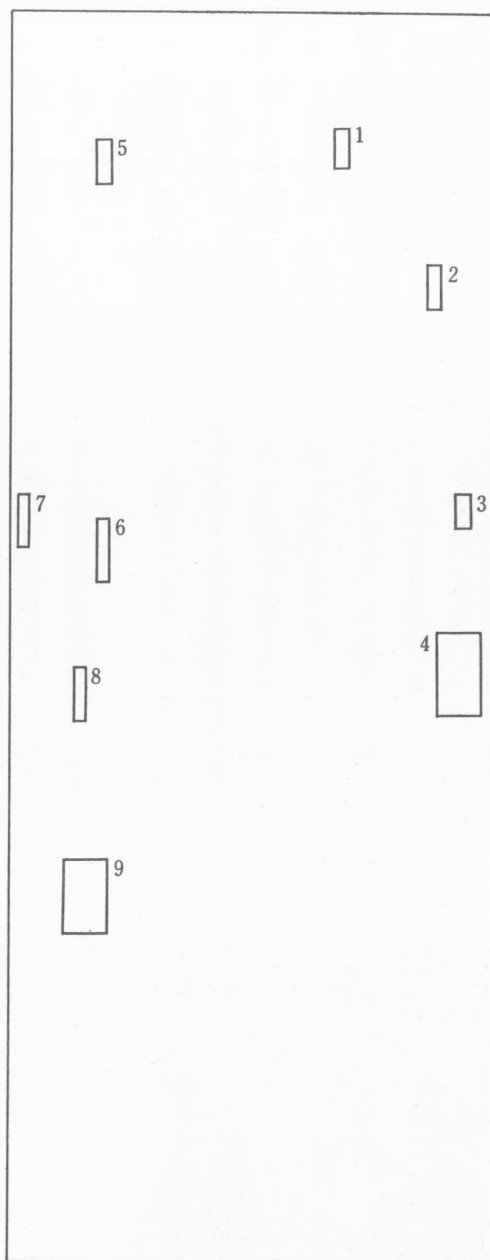
6 釋迦牟尼佛。能說因法。雨大法雨。(三九二上)

2 衆罪如霜露

1 慧日能消除

5是故應至心 懺悔六情根(三九三中・偈)

字塔の左側やや中程に、多くの菩薩が乗る船を操る普賢菩薩(7)と、これに対応して右側に衆生の乗る船を操る菩薩を描き、岸にて地に身を投じて合掌する人物(3)を添え、普賢菩薩を讃える。讃仏としては、字塔初層の左側に、地



中より半出の多宝仏塔の扉を釈迦が開き、多宝仏の身からは光が四方に放たれて、光中に化仏が坐し(9)、更にこの場面の上方7の図の下に仏説法会を描いて讃仏の意を表している(6)。また業障消滅については、字塔の上部両側に漁撈(左)と狩猟(右)(2)を描き、これらの諸罪を日輪が照して(1)霜露の如く消除するを示し、また左側最上部に山中の堂舎にて合掌する比丘(5)を描いて、懺悔の姿を表わす。なお6図の下に三尊仏が描かれているが、この題辭は解読不可能である。強いて読める語を拾うと、

b 同 見取図

8 懺悔 □ 悪業
とも見られる。懺悔を説く仏の姿と観られよう。

以上が観普賢經の図相であるが、中央の上部に日輪を図して、懺悔により六根を清浄するというこの經の眼目を表し、字塔の両側に業障及び功德を図し、更に字塔の基部両側に普賢菩薩觀と多宝仏塔を描いて構図上の均衡と主要なる經意を示している。これらの構成は、各々の図相を総括して、視覚的にも本經の大意が察知されるように配置されたもので、經意絵としては内容的にも、またその表現上の効果に於いても、一応の成功を示すといえよう。

挿図15a 法華曼荼羅 第十幅 奈良 談山神社蔵

(以下次号)